平成18年度理事会，評議員会ならびに総会における報告承認決定事項

第49回社団法人日本糖尿病学会年次学術集会は，田嶋尚子会長主宰のもとに平成18年5月25，26，27日の3日間，東京国際フォーラム，他において開催された．これに先立つ理事会，評議員会は5月24日同会議室，同ホールB7，また総会は同ホールAにて開催された．

1. 第49回社団法人日本糖尿病学会年次学術集会の経過報告

（田嶋会長）

去る5月24日から26日の3日間，東京フォーラムおよび読売ホールにおいて，第49回日本糖尿病学会年次学術集会を開催しました．糖尿病は現在地球規模で拡がっており，成因の解明とその対策には人種を超えた学際的なアプローチが不可欠であります．この観点から，本学会のテーマを「グローバル化する糖尿病：アジアからの発信」と定め，国際的視野に立ち，あらゆる分野の研究成果の集約から，将来の糖尿病対策のあり方を明らかにすることを目指しました．プログラムには，特別講演3題，プレナリーレクチャー3題，シンポジウム17題，そして海外の先駆的研究者を交えて英語でカッテングエッジを論議するインターナショナルセッション5題，教育講演13題を用意しました．さらに新たな試みとして，現在決着のついていない課題を敢えて争点とし，問題点を浮き彫りにするディベートセッションを3題企画しました．この種の討論はわが国では馴染みが薄いことを考え，糖尿病早期スクリーニングの是非を問う1題は，座長，ディベーターとも海外演者とし，ディベートの模範を示して頂きました．また，ポスター演題のうち高い評価を得たものをプレジデントポスターとして夕刻にまとめ，展示会場で大型プラズマディスプレーを用いて口演発表の機会を設けました．この際ワインをサービスして，舌鋒を滑らかにする試みを行いました．応募演題総数1,536，海外からの40名を越す招聘演者，共催セミナー53そして学会参加者数約9,700名はいずれの数をとっても過去最大規模となり，新たな企画はどれも概ね好評でした．また，アジアからの演題を積極的に募るために，発表者に渡航グラントを用意したところ，韓国を中心に20件を超える応募があり，アジア近隣諸国における本学会への関心の高さを感じました．学会最終日に開催した市民公開講座には，雨天に拘わらず4,300名の参加があり，大盛況となりました．

本学術集会にご協力いただきました会員各位にあらためてお礼申し上げます．

2. 平成17年度事業報告および庶務報告

（岩本理事）

●事業報告

1）第48回年次学術集会

会　長　春日雅人（神戸大学大学院医学系研究科糖尿病代謝・消化器・腎臓内科学）

会　期　平成17年5月12・13・14日（木・金・土）

会　場　神戸国際会議場，他

参加者　約8,300名

○会長講演　インスリンシグナリングと糖尿病の発症

○特別講演　Dissecting Insulin Signaling in Liver Using Tissue Specific Knockout and shRNA

○学会賞受賞講演

ハーゲドーン賞　糖尿病の発症ならびに診断に関する疫学研究

リリー賞　①糖尿病血管合併症発症，進展の分子機構の解明

②酸化ストレス，JNK経路を介した糖尿病発症，進展の分子機構の解明

○特別シンポジウム

日本における糖尿病の現状とこれからの対策

○シンポジウム

1. 糖尿病診療における臨床心理の役割と実際―臨床の知の場―　他15題

○教育講演

1. 糖尿病の診断とその問題点　他11題

○市民公開講座「市民のための糖尿病フォーラム」

テーマ：「糖尿病治療の最前線―よりよい糖尿病治療をめざしてー」

○口演発表　491題

○ポスター1,008題

2）出版事業

①会誌「糖尿病」第48巻4号，サプリメント1（抄録集）～第49巻3号を発行

②糖尿病患者向け指導書

i　糖尿病食事療法のための食品交換表　第 6 版　300,000 部発行
ii　糖尿病治療の手びき　100,000 部発行
iii　糖尿病性腎症の食品交換表　10,000 部発行
iv　糖尿病食事療法のための食品交換表 CD-ROM　増刷なし
v　糖尿病性腎症の食品交換表 CD-ROM 付き　増刷なし
vi　Food Exchange List　増刷なし

③医師，コ・メディカル向け指導書

i　こどもの糖尿病・サマーキャンプのてびき　増刷なし
ii　糖尿病食事療法指導のてびき　増刷なし
iii　糖尿病療養指導の手びき　増刷なし
iv　糖尿病治療ガイド 2006-2007　110,000 部発行
v　糖尿病学用語集　18,000 部発行
vi　糖尿病遺伝子診断ガイド　増刷なし
vii　糖尿病専門医研修ガイドブック　増刷なし
viii　小児・思春期糖尿病管理の手びき　増刷なし
ix　糖尿病学の進歩　1,200 部発行
x　糖尿病の療養指導　1,600 部発行
xi　科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン　増刷なし

3）第 40 回「糖尿病学の進歩」

世話人　小泉順二（金沢大学医学部附属病院総合診療部・総合診療内科）
会　期　平成 18 年 2 月 17・18 日（金・土）
会　場　石川県立音楽堂・ホテル日航金沢・金沢全日空ホテル
参加者　3,077 名

①第 1 日目

A 会場

○レクチャー：糖尿病血糖管理に必要な知識
1. 糖尿病の概念　他 5 題

○レクチャー：糖尿病合併症治療に必要な知識
1. 急性合併症（意識障害・昏睡）の診断と治療　他 6 題

B 会場

○レクチャー：糖尿病患者の療養および療養指導における現状と考え方
1. ナースが行う糖尿病患者のフットケア　他 5 題

○シンポジウム：糖尿病予防・治療への地域戦略
1. 国（厚生労働省）における生活習慣病（糖尿病）対策の推進　他 4 題

C 会場

○シンポジウム：厳格な血糖コントロールに向けて
1. いかに厳格な血糖コントロールが必要か　他 4 題

○レクチャー：糖尿病治療におけるエビデンス
1. 細小血管症に対する治療のエビデンスと展望　他 2 題

D 会場

○チーム医療症例検討会―1
1. 慢性合併症のある若年 1 型糖尿病および血糖コントロール不良 2 型糖尿病へのアプローチ

E 会場

○レクチャー：膵 β 細胞とインスリン分泌
1. cAMP によるインスリン分泌増強の分子機構　他 5 題

○レクチャー：インスリン抵抗性研究の最新知見
1. インスリン抵抗性の分子機構　他 6 題

②第 2 日目

A 会場

○シンポジウム：1 型糖尿病への対応
1. 1 型糖尿病の実態と疫学（Ehime Study から）　他 4 題

○レクチャー：ライフステージイベント別の糖尿病治療
1. 思春期・青年期の糖尿病管理　他 3 題

○レクチャー：糖尿病治療の展望
1. 膵島移植や膵移植による糖尿病治療の展望　他 2 題

B 会場

○レクチャー：患者心理・行動科学よりのアプローチ
1. ナラティブ・ベイスト・アプローチ　他 5 題

○シンポジウム：糖尿病患者教育ストラテジー
1. 糖尿病患者教育の考え方の変遷　他 4 題

C 会場

○レクチャー：糖尿病診療ガイドラインをどう活かすか
1. ガイドライン策定とその評価　他 2 題

○レクチャー：患者生活改善のためのエビデンスをどのように作るか
1. こころと行動の変化とエビデンス　他 2 題

○レクチャー：肥満と糖尿病

1. 糖尿病に及ぼす肥満の影響　他2題

D会場

○チーム医療症例検討会―2

1. 肥満およびやせ型の2型糖尿病患者に対するアプローチ

E会場

○レクチャー：基礎研究からの糖尿病治療ストラテジー

1. 膵β細胞移植の最新知見　他5題

○レクチャー：糖尿病性合併症の分子機構

1. 糖尿病網膜症の分子機構と治療　他6題

4)地方会活動

1. 第39回日本糖尿病学会北海道地方会
   会　期　平成17年10月16日(日)
   会　場　旭川グランドホテル
   会　長　羽田　勝計(旭川医科大学第二内科)
   参加者　382名
2. 第43回日本糖尿病学会東北地方会
   会　期　平成17年11月5日(土)
   会　場　仙台国際センター
   会　長　岡　芳知(東北大学大学院医学系研究科分子代謝病態学)
   参加者　470名
3. 第43回本糖尿病学会関東甲信越地方会
   会　期　平成18年1月28日(土)
   会　場　京王プラザホテル
   会　長　石田　均(杏林大学医学部第三内科)
   参加者　1,162名
4. ①第72回日本糖尿病学会中部地方会
   会　期　平成17年10月15日(土)
   会　場　名古屋国際会議場
   会　長　大磯　ユタカ(名古屋大学大学院医学系研究科代謝病態内科)
   参加者　343名
   ②第73回日本糖尿病学会中部地方会
   会　期　平成18年3月18日(土)
   会　場　金沢医科大学本部棟2F～3F
   会　長　古家　大祐(金沢医科大学内分泌代謝制御学)
   参加者　265名
5. 第42回日本糖尿病学会近畿地方会
   会　期　平成17年11月5日(土)
   会　場　大阪国際会議場
   会　長　青木　矩彦(近畿大学医学部内分泌・代謝・糖尿病内科)
   参加者　1,222名
6. 第43回日本糖尿病学会中国・四国地方会
   会　期　平成17年11月11・12日(金・土)
   会　場　サンポートホール高松
   会　長　石田　俊彦(香川大学医学部　内科学講座第一内科)
   参加者　646名
7. 第43回日本糖尿病学会九州地方会
   会　期　平成17年10月14・15日(金・土)
   会　場　くまもと県民交流館パレア・鶴屋ホール東館7館
   会　長　荒木　栄一(熊本大学大学院医学薬学研究部代謝内科学分野)
   参加者　約800名，市民公開講座　約560名

5)分科会活動

1)第20回日本糖尿病合併症学会
   会　期　平成17年10月7・8日(金・土)
   会　場　大手町サンケイプラザ
   会　長　河盛　隆造(順天堂大学医学部内科学代謝内分泌学講座)
   参加者　790名

6)糖尿病週間

平成17年11月7日～13日，第41回全国糖尿病週間の行事が一斉に行われた．テーマは「継続しよう糖尿病療養」.

7)国際糖尿病連合会議

IDF-WPR Council Meetingへの参加
   開催日　2005年10月21，22日，タイ　バンコック
   出席者　春日理事長，清野理事，福島学術評議員

第6回IDF-WPR Congressへの参加
   開催日　2005年10月22～26日，タイ　バンコック

8)普及・啓発・後援事業

①第41回全国糖尿病週間の共催
   期　間　平成17年11月7日(月)～13日(日)
②日本糖尿病協会への協力
   「さかえ」および「つぼみ」発行の企画等
③第8回糖尿病地域医療研究会総会の後援
   平成17年7月30日
④第5回糖尿病教育資源共有機構年次学術集会の後援
   平成17年8月5・6日
⑤糖尿病　Up to Date賢島セミナーの後援
   平成17年8月27・28日

⑥第27回腎不全対策を語るつどいの後援
平成17年9月18日
⑦第5回先進インスリン療法研究会の後援
平成17年8月20日
⑧糖尿病予防キャンペーン
平成17年10月2・22日
⑨The 8th meeting of Immunology of Diabetes Society
平成17年10月6〜9日
⑩糖尿病シンポジウム
平成17年10月8日・11月3・12・26日
⑪「オミックス医療が拓く未来2005」第2回ゲノム医療情報シンポジウム
平成17年10月21日
⑫平成17年度「お米・健康サミット」の後援
平成17年11月24日
⑬第25回日本マグネシウム学会総会市民公開講座　生活習慣病とマグネシウム〜マグネシウムは健康長寿に必須ミネラル〜
平成17年12月2日
⑭第17回分子糖尿病学シンポジウムの後援
平成17年12月3日
⑮第28回腎不全対策を語るつどいの後援
平成18年1月29日
⑯第20回日本糖尿病動物研究会年次学術集会の後援
平成18年2月9・10日
⑰メタボリックシンドローム撲滅運動キャンペーン
平成18年1月20日〜平成19年3月31日

●庶務報告

1）総会

平成17年5月12日，神戸ポートピアホールにて第48回通常総会を開催した．平成16年度事業報告，庶務報告，収支決算報告が承認され，また平成17年度事業計画（追加）および補正予算ならびに平成18年度事業計画および予算が承認された．第50回会長に岡　芳知学術評議員が，第51回会長に門脇　孝学術評議員がそれぞれ選出・承認された．

2）評議員会および学術評議員会

平成17年5月12日にそれぞれ開催された．

3）理事会

定例理事会は平成17年5月11日，11月27日，臨時理事会は平成18年2月16日の合計3回開催された．

●会員状況報告（平成18年3月31日現在）

1．役員等

1）役員

理　事　18名（16年度末　18名）
監　事　2名（16年度末　2名）

2）学術評議員　588名（16年度末　590名，物故2名）

3）評議員　88名（16年度末　88名）

2．会員等

1）名誉会員　27名（16年度末　22名，5名追加）

2）正会員

17年3月末日会員数	14,529名	
17年度新入会	1,040名	
復籍	1名	
名誉会員へ	−5名	
退会	−537名	退会内訳
		会費未納　218名
		希望退会　297名
		物故　22名
正会員　現在数	15,028名（499名増）	

3）賛助会員

17年3月末日会員数	41名
17年度新入会	1名
17年度退会	−3名
賛助会員　現在数	39名（2名減）

3．物故会員

功労学術評議員	小林快三	佐々木陽	
学術評議員	貴田嘉一	藤井　暁	
正会員	石原弘文	小川恒明	大山ミヨ子
	加藤達夫	門脇豊子	河田利延
	菊池　格	草加芳郎	齋藤　裕
	須崎協一	高橋研二	武井義夫
	枦木秀生	畑中行雄	広瀬　寧
	藤島正敏	細萱昌利	松尾博司

（敬称略，連絡のあった方のみ）

3．委員会報告

1）「糖尿病」編集委員会　　委員長　横野浩一

委員会の開催：6回（平成17年4月3日，5月14日，6月19日，8月20日，10月30日，平成18年1月15日）

①出版状況：第48巻4号から第49巻3号までの12誌とサプルメント2として「第48回年次学術集会抄録号」を発行した．

詳細は下表の通りである．（下段：コメディカルコーナー）

②論文受付状況は，平成17年4月1日より平成18

年3月31日までの論文投稿数129編，この期間に掲載可否の決定された153編のうち可となった論文120編，採択率78%であった．採択日から掲載までの期間は4〜5カ月．

③委員改選および佐藤委員長の任期満了(2期4年)に伴い，後任委員長に横野浩一委員，副委員長には横野浩一委員から川上正舒委員へ交替した．

④「治験にかかわる臨床研究論文の取り扱いについて」は以下の基準を設け，いずれかの項目に該当する場合に，審査の対象とし掲載の可否を検討することとした．1)試験された薬物(以下試験薬)が新しい作用機序を有する薬剤である．2)同種の既存薬が他にあるが，試験薬は薬物動態などにおいて有意な新知見があり，投与方法などを含めて実質的に新しい治療法を提案しうるもの．3)試験薬は既存薬ではあるが，これまでに知られていなかった臨床的有用性が証明されたもの．4)国内の臨床試験の結果が外国での臨床試験の結果と大きく異なるもの．5)添付文書に記載されていない情報で，学術的な価値のある情報を提供するもの．

⑤「コメディカルコーナーへの論文掲載について」は執筆者の希望も参考とするが，全論文を対象として編集委員会にて決定する．内容的に特にコメディカルの参考になると編集委員会で認めた論文は，本コーナーに掲載する．この基準の変更に基づき，本コーナーの投稿規定を一部改訂した．

2)「食品交換表」編集委員会　　委員長　伊藤千賀子

(1)食品交換表編集委員会(2回開催)：平成17年5月1日(日)，平成18年3月12日(日)に開催し，以下の作業を行った．

ⅰ)引用許可願いで委員会審議となった3件を審査したが，引用量が多く，著作権に抵触することから不許可とした．

ⅱ)医学書院「糖尿病ハンドブック　第2版」は無断

	総頁数	原著	症例	短報	報告	速報	地方会抄録	委員会報告	特集	会報	その他
Vol. 48 No. 4	80	1 1	1				1		1		
Supplement 2	448	第48回年次学術集会抄録号									
No. 5	92	2 1	4				1				
No. 6	80	1 1	1				1				
No. 7	110	1 2	3				1	1		1	
No. 8	64	2 1	3	1			1				3
No. 9	56	2	3						1		
No. 10	50	1 1	2					1	1		
No. 11	54	3 1	4								
No. 12	70	2 1	2						1		
Vol. 49 No. 1	118	3 1	4				1			1	
No. 2	70	2 1	5				1				
No. 3	62	2 1	4		1		1				
合計	1,354	22 12	36 0	1 0	0 1	0 0	8 0	2 0	4 0	2 0	3 0

出版であり，記載内容が食事療法に関する糖尿病学会の理念からはほど遠く，食品交換表の内容を著しく改悪するものである．医学書院に申し入れをしたが，著作権侵害には当たらないと反論．引用量が極めて多く食品交換表の代替えになることから，理事会に諮り提訴することとした．訴状等については学会顧問弁護士に担当して頂く．委員会で以下のことを取り決めた．①被告は医学書院．②内容は著作権侵害とし，慰謝料については争わない．③とりあえず「糖尿病ハンドブック　第 2 版」を対象とするが，「第 1 版」についても対象とする予定である．

(2)出版事業

①「CD-ROM 版食品交換表(ver. 3)と「CD-ROM 版(ver. 2)付糖尿病性腎症の食品交換表」を共に 2004 年 5 月に出版．

②食品交換表関連の出版状況：17 年 4 月 1 日～18 年 2 月 28 日，(　)は発行以降の累計部数

食品交換表　第 6 版―売上部数：267,184 部(1,500,040)，発行部数：(1,600,000)

糖尿病性腎症の食品交換表　第 2 版―売上部数：8,359 部(46,396)，発行部数：58,000

糖尿病食事療法指導のてびき　第 2 版―売上部数：2,428 部(8,473)，発行部数：18,000

食品交換表の英訳版―売上部数：50 部(1,699 部)，発行部数：2,000

CD-ROM 版食品交換表(ver. 3)―売上部数：1,024 部(3,326 部)，発行部数：4,500

CD-ROM 版(ver. 2)付糖尿病性腎症の食品交換表―売上部数：253 部(969)発行部数：2,000

(3)引用許可願いの審査状況(17 年 4 月 1 日～18 年 2 月 28 日)

①食品交換表　第 6 版：31(許可　24 件，不許可 3 件，取り下げ　4 件)

②糖尿病性腎症の食品交換表　第 2 版：1 件(許可 1 件)

3)「治療の手びき」編集委員会　　委員長　西沢良記

①一般向け書籍『糖尿病治療の手びき』の改訂作業が終了し，2006 年 1 月末に南江堂より刊行された．B5 判，2 色刷，144 頁，初刷 10 万部，定価(本体 650 円＋税)という内容である．10 年来の大改訂であり，内容面では最近の治療の進歩を盛り込むと同時に，メディカルライターによるリライトなどを行い，患者さんとその家族へより分かりやすい内容を心がけた．体裁面では 2 色刷への変更，内容の増加に伴い頁数が増加した．

②『糖尿病治療の手びき』の改訂に伴い，その指導者用向け書籍『糖尿病療養指導の手びき』の改訂作業に取り掛かる．1 月に委員会を開催し，改訂内容・執筆者・頁数等を決定する．現在，執筆依頼済みで各執筆者からの快諾を頂き，4 月 20 日の原稿締切の予定とした．原稿締切後に委員会において編集のための検討を行う予定である．刊行は 2007 年 5 月予定．

③これまで本委員会にご尽力なされた貴田嘉一先生(委員長)が 2006 年 1 月末にご逝去されたため，すでに昨年 5 月の委員会で次期委員長として選出されていた西沢良記がその後任となる．

4)小児糖尿病委員会　　委員長　雨宮　伸

①「小児思春期糖尿病管理の手びき」改訂第 2 版(医療チーム向け)

「糖尿病治療の手びき」(患者向け)および「科学的根拠にもとづいた糖尿病治療の手びきガイドライン」の改訂に沿って，平成 18 年 5 月に刊行予定である．昨今の小児・思春期における 2 型糖尿病の増加や，またこの領域での治療・ケアの進歩を反映すべく，本書に関するアンケートを基に大改訂が提案され，改訂内容と執筆者等が決定された．各執筆担当者に原稿依頼済みである．

② Child-sponsorship Program(IDF)

貴田嘉一前委員長からご報告があったが，現段階では準備が整っていなかった．IDF からの具体的依頼があれば，糖尿病協会とも相談の予定である．

貴田嘉一委員長のご逝去にともない，雨宮　伸(埼玉医科大学小児科)が委員長を代行することとなった．

5)日本糖尿病協会委員会　　委員長　門脇　孝

日本糖尿病協会委員会は平成 11 年 5 月から活動を休止している．日本糖尿病協会が 1960 年に設立以来，当委員会は協会の運営が円滑に行われるようサポートしてきたが，1987 年に協会が社団法人となりその組織は着実に堅固なものとなったことから，当委員会の所期の目的は達成されたものと考えられる．今後，双方の一層の協力・連携の強化を目指すため，現在の細則第 25 条，第 32 条「日本糖尿病協会委員会」の条項ならびに委員会規定の変更を提案する．

6)選挙管理委員会　　委員長　清野　裕

委　員　柳澤克之　山田憲一　河津捷二　榊原文彦　三家登喜夫　石田俊彦　榊田典治

委員会開催　1 回　(平成 18 年 1 月 29 日)

従来 7 月頃に第 1 回の委員会を開催しているが，清野裕委員以外の 7 名は，昨年からの再任であり，会長選挙に係る細則が変更されて以来，選挙の手続きに関してはこれまでの選挙管理委員会にて充分検討され，ほぼ完成しているため，今期はこの時期の委員会の開

催は見送った．その代わりに，郵便，e-メール等を利用して委員会活動を進めていくこととした．従来の申し合わせに従い，理事会推薦の清野　裕委員が委員長となり，以下(1)～(3)の事項を確認した．

(1)平成17年度に次会長，次々会長を選出したため，平成18年度学術評議員会においては，次々会長1名を決定する．

(2)18年度会長選挙の手順について

前年度「会長選挙手順」を踏襲し，

・支部からの推薦締切日は平成17年11月15日(火)とする．
・推薦された方の意思確認は11月24日(木)までに事務局必着とする．
・理事長への報告は11月25日(金)までに行う．
・11月27日(日)の定例理事会で，最終候補者3名を決定する．
・候補者の所信のフォーマットは前年度と同様とし，平成18年1月13日(金)を締切日とする．

(3)候補者の所信が集まった時点で委員会を開催し，以降の進め方について協議検討する．

第52回会長候補者の推薦は従来の手順を踏襲し，平成17年11月27日に開催された理事会にて最終候補者3名を決定した．各候補者の所信は平成18年1月29日に開催された委員会で精査した後，学術評議員に郵送し，ホームページに掲載した．

学術評議員会での投票にあたって次の様に執り行うこととする．

①投票作業は，基本的に候補者のいない支部の委員があたることとして，不足の人員は候補者のいない支部の出席学術評議員の中から委員長が合計8名まで指名する．

②投票用紙を配布・回収する間は，会場を閉鎖する．

③得票数は公表する．

④最終決定は，単純最多得票者とする．

なお，以上は，投票に入る前に会場に公告する．

7)「糖尿病学の進歩」プログラム委員会

委員長　小林　正

「糖尿病学の進歩」プログラム委員会は前年度，次年度の世話人を中心にその反省とより充実したプログラムの構築を目指したものとして毎年1回開かれているが，小泉世話人による金沢での充実した種々の新しい取り組みをうけて，11月20日に開催され羽田世話人による札幌での開催でのプログラム，会場，ランチョンレクチャー，進行全体など，本年9月29，30日に向け，準備について種々検討された．

8)内科系学会社会保険連合　　委員　渥美義仁

委員：渥美義仁，加来浩平，河盛隆造

平成18年度の保険改訂では，厚生労働省は学会の重要性を認識してヒヤリングと意見交換が数回行われた．その中で，学会としてはさまざまな会員の意見を集約して，平成16年度改訂で再診の包括とされたHbA1c(200床以上の医療機関)の復活を中心に，グリコアルブミンとの併施，コントロール不良例でのコントロール指標の複数回測定，非インスリン使用例での在宅血糖自己測定の新設，尿中アルブミン測定の算定条件や判断料の改訂，栄養食事指導料の見直し，など内保連を通して要望した．HbA1cは平成16年度改訂前の算定条件に戻ったが，グリコアルブミンとの併施は認められなかった．非インスリン使用例での血糖自己測定については，患者の自己管理改善や薬剤の適正な選択と評価，低血糖の予防，などの面から，わが国の糖尿病治療を変える可能性を強調し，多方面からアプローチした．厚生労働省内にも認めようという意見もあり，最終段階まで検討されたが最終的には認められなかった．また，今回の改訂発表後明らかになった糖尿病診療に関わる問題点は，学会として改善を要望する予定である．さらに，平成19年度の改訂に向けての要望を提出すべく検討中である．

9)日本医学会に関する報告　　評議員　春日雅人

平成18年2月22日に第73回定例評議員会が開催された．役員改選が行われ会長に高久史麿氏，副会長に岸本忠三氏，久道　茂氏，出月康夫氏が選出された．日本透析医学会，日本内視鏡外科学会の新規加盟が承認された．第28回日本医学会総会の開催地は東京，会頭は矢崎義雄氏に決定した．なお，第27回日本医学会総会は岸本忠三会頭主宰のもと平成19年4月6(金)～8日(日)，大阪にて開催の予定である．

10)国際交流に関する報告　　理事　清野　裕

IDF-WPR Council Meeting

Thailand の Bangkok で2005年10月21日～10月22日に開催され，日本糖尿病学会からは3名出席した．協議事項の主なものは以下5点である．

① Asia Pacific Diabetes Epidemiology Course (APDEC): Professor Bennett からアジア太平洋糖尿病疫学トレーニングコースを IDF-WPR の参加で行いたい申し入れがあり了承された．

② Region Congresses Profit Sharing Formula: IDF-WPR 国際会議の余剰金分配に関する件では，日本は20%を供出することを提案したが，各国の意見が折り合わないので更に10～20%の案を申し出たがこれも賛同が得られなかった．最終的には各国の任意

で行うことになった．

③ Twinning Project：IDF-WPRの重点項目にこのProjectが盛り込まれているが，次の会合で更に検討する．

④ Diabetes Research & Clinical Practiceは堀田先生らの大変な尽力でインパクトファクターも1.73に上昇してきている．各国から応募があるので，Elsevierの雑誌として出版したい旨の申し入れがあった．これに関してはこの雑誌はIDF-WPRのものでありこのままの形態で出版を継続することで合意した．

⑤スマトラ沖「津波」に対する緊急支援を日本糖尿病学会と糖尿病協会から行ったが，インドネシアには届いていないことが判明し，日本としてその原因解明を申し入れた．事務局で教育ファンドに使用する旨の説明があったが，日本としては納得し難いと主張し，当日，日本，インドネシア，事務局の3者で会談を行い，当初の目的に沿って使用することで合意した．

⑥次回のIDF Congressは本年12月にケープタウンで，IDF-WPR Congressは2008年ニュージーランドで開催される．

⑦次回のIDF-WPR Council Meetingは本年6月29日～7月1日東京で開催することとした．

⑧従来から行われている日中，日韓糖尿病シンポジウムに対して日本糖尿病学会として何らかのサポートを行う．

・国際糖尿病連合（IDF）に関する報告

IDF Vice President　堀田　饒

国際糖尿病連合（IDF）の会議で，出席したのは本会議（理事会）が3回，19th World Diabetes Congress, Cape Town 2006の組織委員会が3回，そしてIDF Guidelines Meetingが1回である．本会議（理事会）は，2005年5月5～9日にフランスのストラスブルグ，2005年11月17日にインドのジャイプール，2006年3月11～12日にドイツのフランクフルトで，IDFとして糖尿病対策ストラテジープランを2007年に向け作成し，世界的に普及活動を行うこと，それと関連して“糖尿病2007”と題し“UN決議”のキャンペーンを行うことが提案・討議された．一方，2006年12月3～7日に開催される19th World Diabetes Congress, Cape Town 2006の組織委員会が2005年3月8日に南アフリカのケープタウン，2005年9月16日にギリシャのアテネ，そして2006年3月10日にベルギーのブラッセルにて開かれ準備状況およびプログラム案などが発表され，種々討議された．尚，2009年の20th World Diabetes Congressは，カナダのモントリオールと決定した．

IDFによる活動の一つに出版事業がある．IDF Guidelines Meetingが2005年2月24～26日にイギリスのロンドンで開かれ，糖尿病臨床の全領域に亘って，一領域2名が分担してプレゼンテーションを行った後，全員参加によるガイドライン作成に向けた討議がなされた．小生の分担は糖尿病性神経障害でProfessor Andrew Boulton（UK）と共同作業を行った．その成果は“Global Guideline for Type 2 Diabetes”として2005年に刊行されたが，Clinical Guideline Task Forceの事業の一環である．また，IDF Consultative SectionとInternational Working Group on Diabetic Footが一緒になって，“Diabetes and Foot Care：Time to Act”が出版された．IDFの機関誌としては“Diabetes Voice”4回/年が出版され，特集号として“Put feet first”と“Smoking and diabetes”が追加されている．IDF-WPRの機関誌は12回/年が順調に出版され，Impact Factorも1.74と過去最高となった．

2006年の“World Diabetes Day”は，11月14日でスローガンは“Diabetes CARE for everyone”である．

11）学術調査研究・教育に関する報告

理　事　小林　正

学術調査委員会では現在10件の調査研究がなされており，そのうち4年以上の期間に亘って活動している7つの委員会は平成18年中に一旦終結し，成果報告を提出することとした．今後も活動の継続を希望する場合は，委員会メンバーの交代，委員会の名称変更等を含む見直しをして，新委員会として再申請することとした．新たに「若年発症2型糖尿病の合併症発症率の全国専門施設における調査研究委員会」が承認され平成18年度より活動を開始する．

（1）糖尿病関連検査の標準化に関する委員会（第二次開始：1998年7月23日）　委員長　富永真琴

委員会の開催：平成17年5月13日（神戸市），11月18日（福岡市）

テストミール開発ワーキンググループの開催：平成17年2月18日（仙台市），5月13日（神戸市）

GA標準化ワーキンググループの開催：平成17年5月13日（神戸市），11月18日（福岡市）

① HbA_{1c}の国際標準化について

HbA_{1c}の国際標準化に関するアンケート調査の報告を行った．IFCC法へ移行するに際し基準値を再度見直す必要がある．ヨーロッパにおけるHbA_{1c}（IFCC値）の基準値上限は4.2%と報告されている．日本の基準値上限は5.8%とされているが，これを

IFCC 値に換算すると 4.5% となり，無視できない差がある．そこで，山形県舟形町の糖尿病検診やその他のドック検診施設から試料を提供して頂き，IFCC 値で値付けをし，日常測定法で測定した HbA_{1C} 値から NCCLS の手法に準じて基準値の設定を行うこととした．HbA_{1C} の標準物質である JDS Lot 2 は 2006 年 3 月で 5 年を経過したので，新たな Lot 3 の開発の認証が必要であるが，これは日本臨床検査標準協議会(JCCLS)で行われた．

②テストミールの開発

テストミール A の検討を終了し，「糖尿病」に論文を投稿した．脂質構成割合を 25% にしたテストミール B について委員の所属する施設で，正常耐糖能，IGT，糖尿病を対象に負荷試験を行うこととした．

③ GA の標準化

分析化学的手法に基づく標準測定法について引き続き検討中である．

④委員会の新たな発足

本委員会は 2006 年 5 月には 8 年を経過するので一旦活動を終了し，2006 年年度中に各支部から委員を推薦頂くなどの変更を加え，新たな体制で本委員会を継続することを提案したい．

(2)遺伝子異常による糖尿病に関する調査研究委員会(開始：1996 年 8 月 11 日)

委員長　南條輝志男

分子生物学の急速な進歩により糖尿病の原因となる遺伝子の異常が次々と明らかになってきている．本委員会はそのような現状を受け，①本邦における遺伝子異常による糖尿病の実態調査，②遺伝子異常による糖尿病に対する理解の普及の二点を主な目的として活動を行ってきた．①に関しては，「ミトコンドリア異常による糖尿病」の実態調査を行い，その結果は，学会誌「糖尿病」にすでに掲載しており(47：481-487, 2004)，また，②に関しては，「一般臨床に携わっている方が，どのような特徴を有する糖尿病患者さんを診察した場合に，遺伝子異常による糖尿病を疑ったらよいか」をテーマに「糖尿病遺伝子診断ガイド」を委員会として執筆，発刊した．同ガイドは，この領域の進歩が急速であることから，2～3 年おきに改訂を行っている．さらに，「一般臨床に携わっている者が，遺伝子異常による糖尿病を疑っても，なかなか遺伝子解析を行うことが困難である」とのご意見をいただいたのを受け，MODY3 の原因遺伝子である HNF-1α 遺伝子を対象に患者さんの DNA の解析支援を行ってきた．現在までに，60 例の検索依頼があり，MODY3 が疑わしい 16 例に関し，解析を行い，4 例で糖尿病の発症に関する遺伝子変異が同定されている．本解析支援に関しては，現在も委員会に継続して依頼があることから，今後も行っていきたい．

(3)糖尿病の一次予防に関する調査研究委員会(開始：1999 年 9 月 23 日)　　委員長　小林　正

糖尿病の一次予防は，現在の糖尿病発症の増加している日本において，重要な調査研究の対象となる分野で，委員会では内外の現在までの研究結果を踏まえ，一次予防の対策にどの様なものが有効なのか，また実際的であるのかをまとめ，雑誌「糖尿病」に報告することにし，現在その制作にあたっているところである．

その項目として，

①内外の evidence はどこまであきらかにされているか？

②一次予防を目指す実際的な方法

③糖尿病一次予防がなぜ重要であるか？

a. 検診のあり方．

b. 検診の結果から介入への問題点とその対策．

c. 患者教育の問題点とその対策．

d. 食事，運動療法の効果的方法(保険適用はないが薬物療法は？)．

また，その予防法を簡単にまとめたパンフレットを療養指導士・医師用，患者啓発用などのために準備中である．その種類を次のような対象としてまとめることにした．

・開業医のできるこ．

・厚生センター(行政)のできること？

・その他

(4)糖尿病の死因に関する調査研究委員会(開始：2000 年 10 月 30 日)　　委員長　堀田　饒

委員：岩本安彦，大野良之，春日雅人，吉川隆一，豊田隆謙，中村二郎(50 音順)

第三次(1991～2000 年)糖尿病患者の死因に関する調査では，全国 282 施設から 18,639 症例分のアンケート調査用紙が回収され，データ入力および最終的なデータ解析が終了した．第二次調査と同様の委員会報告を雑誌「糖尿病」へ投稿するとともに，さらなる解析を追加し英文誌へ投稿することとなった．雑誌「糖尿病」への原稿執筆は，平成 18 年 4 月の段階でほぼ終了している．

(5)劇症型及び緩徐進行 1 型糖尿病調査研究委員会(開始：2000 年 7 月 15 日)　　委員長　牧野英一

(i)劇症型糖尿病調査委員会報告

妊娠に関連して発症した劇症 1 型糖尿病について，一般の劇症 1 型糖尿病に比べても発症時の代謝異常が更に高度であること，疾患感受性 HLA ハプロタイプ

が異なること，また胎児予後が非常に悪いことを明らかにし，英文論文として発表した（Shimizu I et al. J Clin Endocrinol Metab 91 : 471-476, 2006）.劇症 1 型糖尿病患者の糖尿病合併症に関する予後調査を行い，発症 5 年後に既に網膜症，腎症，神経障害を発症する症例が多数認められることを明らかにし，劇症 1 型糖尿病が細小血管合併症のハイリスクグループであることを明らかにした（投稿準備中）.

(ii)緩徐進行 1 型糖尿病調査委員会報告

①委員会施設における糖尿病発症 5 年以内の多施設間前向き検討：現在まで 332 検体を集積し，“2 型糖尿病”中に約 10% の膵島抗体（GAD 抗体 and/or IA-2 抗体 and/or IAA）陽性例を認めた．GAD 抗体陽性率は他の抗体と比べて有意に高頻度であった．今後さらに症例数を増やすとともに，その自然経過の前向き観察を行っていく.

②全国調査：現在まで 50 施設から 102 症例の登録を受けている．さらに登録を増やし緩徐進行 1 型糖尿病の実態を明らかにし，診断基準の作成に役立てたい.

(iii)その他

1 型糖尿病遺伝子の網羅的解析として候補遺伝子約 270 の SNP と急性発症 335 例，緩徐進行 128 例，劇症 86 例，健常対照 247 例（サンプル収集は継続中）との関連を解析センター（東京大学人類遺伝学教室）にて解析を進め，約 1/3 の SNP に関して結果を得た．サブタイプ毎に異なる遺伝子との関連を認めている.

(6) 食事療法に関する検討委員会（開始：2001 年 9 月 30 日）　委員長　津田謹輔

委員会・小委員会開催日：6 月 14 日，8 月 27 日，9 月 23 日

①食事療法に関する実態調査，SF36 アンケート調査

学術評議員の協力で得られた 601 例の調査とは別に，臨床糖尿病医会の協力のもとで 256 例同じ調査を行った．2 つのグループで得られた結果を検討したところほぼ同じ結果であった．論文作成中.

②糖尿病患者の代謝機能測定

ミナト医科学の呼吸代謝測定システムを用いて，日本大学と京都大学で糖尿病患者の安静時エネルギー量を測定している．日本医大で 91 例，京都大学で 122 例のデータについて解析中である．一部データは今学会で報告.

③特定保健用食品データベース作成

学会が特定保健用食品を勧めているような誤解を与えないよう細心の注意を払い，特保申請論文のデータベースを小冊子にまとめられるよう作業中である.

④糖尿病患者の食事摂取調査

食物摂取頻度法による糖尿病患者の食事摂取調査を計画している．委員である佐々木　敏（国立健康・栄養研究所）が作成された DHQ を用いる予定．摂取エネルギー量はもちろん三大栄養素や微量栄養素についても推測できる.

現委員会として，上記データの論文化，データベースの作成をしあげる予定である.

(7) アジア人糖尿病調査研究委員会（開始：2001 年 11 月 18 日）　委員長　南條輝志男

本委員会は平成 13 年度に「アジア人共通の糖尿病臨床像の把握およびその原因の解明」を目的に発足し，アジア各国（韓国，中国，台湾，香港，モンゴル，フィリピン，タイ，インドネシア，シンガポール，マレーシア）と共同で 1 型および 2 型糖尿病の疫学調査および栄養調査を行うことを決定した．1 型および 2 型糖尿病の疫学調査を開始し，その結果の一部を平成 16 年度の日本糖尿病学会年次学術集会のアジアセッション「Asian Diabetes」において伊藤委員よりご発表いただいた．栄養調査に関しても各国での食習慣，食物の違いを考慮し，アジア各国の栄養士の協力を得て，調査票を作成し，現在調査を行っており，その結果の一部は第 9 回日本病態栄養学会（平成 18 年 1 月）のパネルディスカッション「アジアにおける栄養治療の現況」（座長　伊藤千賀子先生）において，アジア各国の医師，栄養士よりご発表いただいた．今後これらの報告をもとに論文作成の必要があり，現在準備および追加データ収集中である．また，本委員会発足以後毎年の日本糖尿病学会年次学術集会において必ずアジアセッションが設けられるようになっており，今後もアジア人糖尿病の調査研究はもとより，アジア各国の糖尿病専門家との国際交流に本委員会が果たしてきた役割はきわめて重要であったと考えられる.

しかしながら，本委員会も発足後 4 年が経過したところであり，委員長や委員の交代などを行い，リフレッシュした新委員会として，本委員会の活動をさらに発展・継承していく必要があり，現在検討中である.

(8) 糖尿病性神経障害の実態調査と国際比較調査研究委員会（開始：2003 年 5 月 13 日）

委員長　堀田　饒

委員：渥美義仁，岩本安彦，大野良之，
佐々木秀行，中村二郎，馬場正之，安田　斎

平成 18 年 4 月 15 日に第 4 回委員会が開催された．実態調査の対象施設を日本糖尿病学会教育認定施設とし，約 1,000 例を登録し，1 年ごとにデータを回収し，5 年間経過を観察することとなった．調査項目，問診

項目，理学所見および神経機能検査に関するマニュアルに関する最終確認を行い，調査票全体に関する検討を行った．今後，倫理委員会に関する問題点などを明らかにし，できるだけ早い時期に登録を開始することとなった．

(9)妊娠糖尿病の定義・スクリーニング，診断基準の再評価に関する調査研究委員会(開始：2003年10月5日)　委員長　豊田長康

委員：岩本安彦，河盛隆造，折笠秀樹，伊藤千賀子，穴沢園子，佐中真由実，和栗雅子，平松祐司，鮫島　浩，三田尾　賢，安日一郎，杉山　隆

妊娠糖尿病(gestational diabetes mellitus：GDM)は，各種の母体及び胎児・新生児合併症(周産期合併症)を生じること，たとえ分娩後にいったん耐糖能が正常化しても将来糖尿病に進展する可能性が高いこと，また，最近では胎児期の子宮内環境の異常が，成人期の代謝性疾患(肥満，糖尿病等)の原因になりうることが示唆されていることから，その早期発見に努め，妊娠中から適切な治療・管理を行う必要がある．この妊娠糖尿病の定義，診断基準，スクリーニング法という基本的事項について，EBMに基づいた観点から，また，国際的な指針との整合性も考慮しつつわが国において共通認識を確立する必要があることから，本調査委員会が発足した．

今年度は，オーストラリアにおけるランダム化比較試験によって，比較的軽症(負荷前値140 mg/dl以下かつ75gブドウ負荷後2時間値140～198 mg/dl)の耐糖能低下妊婦に対して治療的介入を行うことにより，周産期合併症の頻度が有意に低下することが報告された．

また，11月にThe Fifth International Workshop-Conference on Gestational Diabetes Mellitus(以下第5回GDM国際会議と略)が開催され，本調査検討委員会の委員が出席した．このGDM国際会議は，ほぼ5年毎にシカゴで開催されており，妊娠糖尿病に関する国際的な指針を決定する最も重要な会議である．この会議の開催前のDiabetes Care誌上に，現行の妊娠糖尿病の定義を以前の定義に戻すべきであることを主張する意見が掲載されたが，第5回GDM国際会議では，現行の妊娠糖尿病の定義を変更せずに継続する見込みとなった．

また，わが国における妊娠糖尿病のスクリーニングに関する多施設共同研究がさらに進行し，妊娠初期ならびに妊娠中期において各種スクリーニング法の精度分析およびコスト分析がなされた．それによると，妊娠初期に妊娠糖尿病の約8割が発見されること，妊娠初期については随時血糖値(カットオフ値95 mg/dl)が，妊娠中期においてはブドウ糖チャレンジテスト(カットオフ値140 mg/dl)が，精度分析およびコスト分析の結果からスクリーニング法として妥当であるという結果が得られた．

平成17年度は，本調査研究委員会は1回の会議を開催し，上記の新たな情報をもとに，前年度の議論も踏まええつつ，最終年度としてのまとめに向けて議論を行った．そして「妊娠糖尿病の定義，診断基準，スクリーニング法に関する提言」(未定稿)を作成した．なお，調査研究委員会は平成17年度で終了したが，本提言については，第5回GDM国際会議の報告が近々Diabetes Care誌に掲載されるのを待って，必要があればさらに修正を加えた上で，最終稿として理事会に提出する予定である．

(10)日本人におけるインスリン分泌とインスリン抵抗性に関する実態調査研究委員会(開始：2004年7月19日)　委員長　清野　裕

本委員会は日本人のインスリン分泌能とインスリン抵抗性の実態を調査し，それぞれを評価するための検査法や結果の解析法を確立すると共に，今後標準的な評価法を提唱するため設置された．現在20名の委員が，それぞれの施設における調査経過の報告を終え，各施設からのデータ収集を開始した．すでに10,000例を超えるデータが集積されつつあり，議論を重ねながら最終的に全国的なレベルで多数例の解析を行い，実態に沿った基準の提案を行う．

すでに，「日本人の耐糖能低下要因」，「日本人2型糖尿病の糖代謝―ミニマルモデルを用いた検討」，「ハワイ日系米人などとの比較による日本人糖尿病発症要因」，「インスリン抵抗性指標HOMA-Rと様々な因子との関連性」，「Primacy of β-cell dysfunction in the development of hyperglycemia」，「UCP-2遺伝子多型と糖尿病・肥満の病態の関連」，「日本人におけるインスリン分泌・抵抗性―ミニマルモデル解析―」「田原坂スタディの経過報告」「インスリン抵抗性の新しい評価法」「境界型から2型糖尿病への移行―インスリン抵抗性およびメタボリックシンドロームに関する検討」「インスリン抵抗性―グルコースクランプ法による300例の成績より―」「メタボリックシンドロームと糖尿病」，「大山町住民糖尿病検診受診者のインスリン分泌と抵抗性」「糖尿病患者の実態」「ホメオスターシスモデルによるスターリング曲線の解釈」「メタボリック症候群の診断基準の検討と診断マーカーの開発」「糖尿病患者の実態」「健常人(大学教職員)のインスリン分泌/抵抗性と高分子量アディポネクチン」「日本人2型糖尿病患者における脂肪とインスリン抵抗性」「CPR(C-peptide

immunoreactivity）の臨床的意義について」などについての調査研究結果をまとめている．

HOMA 指数，経口糖負荷試験，グルカゴン負荷試験，グルコースクランプ，ミニマルモデル，体脂肪分布，肥満，脂肪細胞関連因子，炎症関連因子などについてのデータを集積し，それぞれのデータを用いて，種々の評価方法に基づいて解析する．北から南まで全国レベルで，より多くの施設からのデータを，より多数例について集積することに留意し，日本人のインスリン分泌能とインスリン抵抗性の実態を解明する．また，海外の研究結果と比較するなどして，日本人糖尿病のインスリン分泌能と抵抗性に関する特徴を明らかにすることを目指す．現在スタート 2 年目であるが，これまで 1 年目に 4 回，2 年目 3 回の委員会を開催し，調査結果の公表と共に着実に成果を上げ，17 年度 3 月末日を期日としてデータを各施設から収集する．得られた実態調査をもとに 3 年目にはシンポジウムを開催し，幅広く学会員の意見を集約し 4 年目にはわが国のインスリン分泌，インスリン抵抗性の実態を基に臨床的な指標などについて提言も行う予定で，4 年で終了とする．

12）平成 18 年度坂口賞および学会賞に関する報告

1）坂口賞は，羽倉稜子氏に授与する．

2）学会賞審査委員会（委員長　清野　裕）を平成 18 年 1 月 14 日に開催し，各受賞者を選出した．

①平成 18 年度ハーゲドーン賞

河盛隆造（順天堂大学医学部内科学・代謝内分泌学講座）「糖のながれにおける肝糖取り込み率制御因子の解明」

②リリー賞

ⅰ山内敏正（東京大学大学院医学系研究科糖尿病・代謝内科統合的分子代謝疾患科学講座）「脂肪細胞由来の抗糖尿病・抗動脈硬化ホルモン，アディポネクチンの受容体同定と作用メカニズム・病態生理学的意義の解明」

ⅱ三木隆司（神戸大学大学院医学系研究科細胞分子医学）「グルコースホメオスターシスにおける ATP 感受性 K^+ チャネルの重要性―遺伝子改変動物による研究―」

13）学会認定事業に関する報告

（1）専門医認定委員会　　委員長　清野　裕

委員会は小委員会も含め 7 回開催された．平成 17 年度の専門医試験は 301 名が受験し，224 名が合格した．研修指導医は 85 名（随時審査も含む），専門医研修認定教育施設は 26 施設が認定された．更新は専門医 730 名・指導医 202 名・認定教育施設 133 施設であった．専門医の更新・申請書類を見直し，改訂を行った．認定教育施設・専門医の糖尿病研修カリキュラムについても見直しを行っており，改訂予定である．

無床施設申請の提出が始まったが，1 年間でも研修を認めるため基準を厳しくすべきとの意見から解説を改訂した．また，認定証のサイズを A4 から B4 へ変更することとした．平成 18 年 3 月 26 日には，数名の委員により専門医試験のあり方について試験委員会との合同ワーキンググループ会議を行った．内科系の同会議においては，学会の構成における内科医数も重要との見解が示され，これについても検討する必要がある．

日本専門医認定制機構から適正な専門医数を算出することを求められ，学術評議員にアンケート調査を行った．継続して検討していく．

（2）試験委員会　　委員長　荒木栄一

平成 17 年 5 月 14 日，第 22 回試験委員会を開催し，第 16 回専門医試験の試験方法と出題問題の作成分担，口頭試験担当者，試験監督担当者を決めた．7 月 31 日に委員長，数名の委員により試験問題のチェックを行い，10 月 2 日に委員全員で試験問題の選定を行った．第 16 回専門医試験は，平成 17 年 10 月 23 日，都市センターにおいて実施した．受験者は 301 名で，11 月 6 日に合否判定案を決定，11 月 20 日専門医認定委員会に報告，224 名の合格が承認された．平成 18 年 3 月 26 日には，今後の専門医試験のあり方について，数名の委員により認定委員会との合同ワーキンググループ会議を行った．

なお，第 17 回（平成 18 年度）の試験は平成 18 年 10 月 22 日（日）全共連ビルにて，第 18 回（平成 19 年度）の試験は平成 19 年 10 月 28 日（日）都市センターで実施することとした．

14）学会設立 50 周年記念事業に関する報告

（1）記念誌委員会　　委員長　清野　裕

委員：葛谷　健，島田　朗，寺内康夫，山田祐一郎

ワーキンググループ：大原　毅，高本偉碩，長坂昌一郎，藤本新平，船江　修（第 3 回委員会から）

委員会開催 6 回（平成 17 年 5 月 27 日（金）・8 月 19 日（金）・9 月 27 日（火）・11 月 7 日（月）・12 月 24 日（土）・平成 18 年 1 月 29 日（日））

第 1 回委員会で，「ありきたりでなく若い先生方に興味を持って読んでもらえる記念誌作りを目指す」との基本姿勢を決め，第 2 回委員会で，見積書の提出があった出版社 3 社の中から㈲エディットに決定した．

第3回委員会からはワーキンググループの5名が加わり，年表の柱となるキーワードを挙げて，そのキーワード毎に分類して年表を作成することにした．名誉会員・功労学術評議員に対し，資料提供や意見を求める依頼状を送付することとした．

第4回委員会では，全体の構成の検討に先立って，以下の点を確認した．

①「糖尿病学」の50年ではなく，「糖尿病学会」の50年を中心とする．

②主だったことについては執筆原稿とし，座談会等の記事は必要に応じて扱う．

③原稿作成者はある程度対象者を限定するが，広く会員に執筆依頼をする．

④ワーキンググループの役割は，(1)年表の内容を領域毎に分担してチェックする，(2)集まった写真の第一段階の選別(掲載に向かない写真の選別)を行う，(3)執筆内容についての疑問点をチェックする，である．

年表では，10個のキーワードを決め，その内容をチェックするワーキンググループの分担を決定した．さらに，糖尿病学の歩み(読み物)の年代区分，TOPICSとして紹介するテーマなどの大枠も決定した．

第5回・第6回委員会では，レイアウトやページ数の割振り等の構成について検討し，原稿執筆候補者，座談会の参加候補者の人選を含む，最終委員会案をまとめ理事会に提案し，現在各項目における作業が進行中である．

この50周年記念誌は平成19年秋に完成し会員に配布する予定である．

(2)記念式典委員会　　委員長　岩本安彦

平成18年1月29日(日)に式典委員会とシンポジウム委員会で合同委員会を開催し，シンポジウムの進行準備について協議した．特別講演演者，式典招待者リスト，懇親会および関連事業などについて検討中である．

(3)記念シンポジウム委員会　　委員長　小林　正

式典委員会との合同委員会により，大まかな進行を決め，それに沿って外国のシンポジストの選考などを行った．第一候補者から第七候補者まで決め，これから調整を行っていく予定である．

15)分科会に関する報告

日本糖尿病合併症学会　堀田　饒

日本糖尿病学会の分科会である日本糖尿病合併症学会は，平成17年10月7，8日の2日間に亘って河盛隆造会長(順天堂大学医学部内科学代謝内分泌学講座教授)の下，第20回日本糖尿病合併症学会として東京の大手町サンケイプラザにて開催された．

学会は，特別講演1題，特別招待講演1題，シンポジウム6題，そして一般演題は例年通り全てワーク・ショップ形式で行われた．市民公開講座も10月9日に順天堂大学有山記念講堂でもたれた．本学会が設けた学会賞の各賞の受賞者は以下の各先生でOutstanding Foreign Investigator AwardはMichael A Brownlee教授(Albert Einstein College of Medicine)，Distinguished Investigator Award：吉川隆一(滋賀医科大学)，Expert Investigator Award：八木橋操六(弘前大学医学部病理学第一講座)，Young Investigator Award：高木　均(兵庫県立尼崎病院眼科)，横手幸太郎(千葉大学大学院医学研究院糖尿病・代謝・内分泌内科)．

平成18年に予定されている第21回日本糖尿病合併症学会は，八木橋操六会長(弘前大学医学部病理学第一講座)の下，10月6，7日の2日間に亘って，弘前文化センターおよびホテルニューキャッスル弘前を会場にして開催されることが決定している．学会の機関誌「糖尿病合併症」は抄録号を含め，3回発行された．

16)糖尿病総合対策への取り組みに関する報告

理事長　春日雅人

平成17年2月に糖尿病対策推進会議が発足し，一年が経過した．この間に各地で様々な運動，活動が展開されている．この動きが更に活発になる様，学会としても資金的な援助を行うこととした．

(1)「対糖尿病戦略5ヵ年計画」作成委員会

委員長　門脇　孝

平成16年5月に「対糖尿病戦略5ヵ年計画」を完成し，文部科学省，厚生労働省をはじめ，関連団体に説明を行った．平成17年6月からは学会ホームページに掲載し会員からのパブリックコメントを聴取している．

平成17年度から対糖尿病戦略研究(Japan Diabetes Outcome Intervention Trial：J-DOIT)が開始されることになった．平成17年度から21年度にかけて，40億円以上の研究費が投入され，J-DOIT1(2型糖尿病の発症を50%抑制する介入方法の研究)J-DOIT2(2型糖尿病患者の治療中断率を改善する介入方法の研究)，J-DOIT3(2型糖尿病の血管合併症を30%改善する介入方法の研究)の3ステージに，わが国から発信されるエビデンスの収集及び確立を目指す大規模研究である．糖尿病対策推進会議，データベース構築と共に着実に成果を上げつつある．

本委員会では，「対糖尿病戦略5ヵ年計画」の達成状況を定期的に評価し理事会に報告する．

(2)「健康日本 21」の糖尿病対策委員会報告

委員長　伊藤千賀子

ⅰ.「健康日本 21」の糖尿病対策委員会は通算 9 回(2005 年 5 月 1 日)，10 回(2006 年 3 月 5 日)の 2 回開催した.

ⅱ. 委員会活動

平成 17 年 3 月に作成した「糖尿病治療のエッセンス」の要約版とⅲ.に示すツールの原案を作成した. 18 年 2 月 16 日の糖尿病学会理事会で学会員の糖尿病対策活動費が 18 年度補正予算として計画されたことから，3 月 5 日の委員会ではこの補正予算(案)の活用について討議した.

ⅲ. 糖尿病対策推進会議を受けた活動

日本医師会との協議は断続的に行われて，7 月 4 日の幹事会で日本医師会から「糖尿病治療のエッセンス」要約版作成の要望等が出された. それを受けて，委員間で e-mail で意見交換をして最終案をとりまとめた. これらのツールは都道府県単位の糖尿病対策推進会議で活用される予定. 要約版は 12 月 26 日の幹事会で検討された後に印刷され，平成 18 年 3 月に日本医師会の会員に配布された. 委員会で立案されたツールは以下のものである

①病診連携のための書式を作成.

②健診受診率向上と事後の指導のためのパンフレットと対応する問診票の作成. 事後の指導を評価するための問診票.

③糖尿病患者管理の徹底のためのツールとして「糖尿病治療のエッセンス」の項目に則ったチェック用のシートならびに療養経過を見るためのシートの作成.

④紹介状・逆紹介状の作成

⑤「糖尿病治療のエッセンス」から抜粋した「要約版」の作成

⑥検診の要医療者について医療機関受診状況調査や受診奨励のための啓発資料の作成.

ⅳ. 糖尿病対策推進会議の名称変更について

都道府県に糖尿病対策推進会議が立ち上がってくることが予測されるので，平成 17 年 2 月に設立総会をした糖尿病対策推進会議を「日本糖尿病対策推進会議」に変更. 日本医師会は地域の糖尿病対策推進会議に対して，その活動状況により 20～50 万円の補助金を 12 月末に支給. 日本医師会の調査(2005 年 11 月 30 日)では糖尿病対策が行われている都道府県は 89.4% に上る.

(3)データベース構築に関する委員会

委員長　小林　正

日本腎臓学会，糖尿病眼科学会から協力を得ながら，プロトコールを作成した. また，厚生科学費からの研究助成を受けられることになり，厚生労働省からの要望で，日本歯周病学会も参加することとなった. 平成 18 年には，本格的にデータ収集の活動が開始される見込みである.

17)各種委員会

(1)糖尿病治療ガイド編集委員会 委員長　岩本安彦

委員：荒木栄一，岩本安彦，柏木厚典，門脇　孝，貴田岡正史，櫻井秀也，田嶼尚子，南條輝志男

①委員会の開催

平成 17 年 7 月 24 日，10 月 6 日，平成 18 年 1 月 9 日の 3 回委員会を開催し，昨年度に引き続き「糖尿病治療ガイド 2006-2007」の発行に向けて改訂作業を進めた.

②改訂作業

各委員で分担して改訂に向けて検討個所を確認すると共に，全体で討議して，追加や訂正の作業を行った. また，検討が残った部分については，各委員で分担して改定案を作成した.

③学術評議員校閲用委員会案(見本)の作成

上記作業を経て，平成 17 年 11 月末に学術評議員校閲用の見本を作成し，12 月初頭に全学術評議員へ送付し，年末にかけて意見を頂いた.

④「糖尿病治療ガイド 2006-2007」の発行

学術評議員からのご意見をもとに，さらに追加・訂正を加え，平成 18 年 2 月に開催された「第 40 回糖尿病学の進歩」において，改訂版「糖尿病治療ガイド 2006-2007」を発行した.

⑤改訂のポイント

今回の改訂では，糖尿病臨床の進歩を背景に全体をきめ細かく見直し，とくにメタボリックシンドロームの日本での診断基準，糖尿病に合併した高血圧と脂質代謝異常の治療指針，新しい経口血糖降下薬やインスリン製剤などについて加筆を行った.

巻末には新たに，本文中の略語と，現在使われている経口血糖降下薬，簡易血糖測定器を一覧表にまとめ，読者のニーズに応えるよう努めた.

改訂にあたって，本学会の診療ガイドラインや治療の手びきとの整合性はもちろん，他の学会のガイドラインに示されている数値目標についてもとり上げたが，当委員会の検討だけでは改訂できない問題については，次回の改訂に委ねた.

⑥発行部数と売上の状況

平成 18 年 2 月　発行 80,000 部　売上 68,936 部

3 月　発行 20,000 部　売上 25,556 部

(累計 94,492 部)

4月にさらに30,000部を増刷・発行を予定している.

(2)インターネット委員会　　委員長　田嶋尚子

平成17年12月17日(土)(東京)および平成18年2月17日(金沢)の2回，インターネット委員会を開催した．継続審議事項，学会ホームページへのリンク依頼および広告掲載の許可等については，イ委員会メイリングリストを利用して常時検討している.

①オンラインジャーナルについて

学会誌「糖尿病」は43巻～49巻第2号までがオンラインジャーナルとして既にホームページに掲載されている.

② J-STAGEについて

文献検索が容易で利用しやすいJ-STAGE(電子ジャーナル共同利用センター運用)を現行のUMINと併用できないものか，技術上及び経費の点から検討を開始した．期間は，UMINに掲載されている現行のオンラインジャーナルのデータをJ-STAGEでも読めるように，J-STAGEが無料で加工してくれる2005年から3年間とした.

③ホームページについて

糖尿病学会本部のホームページを，会員向けの情報発信のみならず，将来，一部を一般公開できるようにデザインも含めて全面的にリニューアルし，管理者，掲載内容，リンク集の整理，文責などについて検討した．現時点では，従来のホームページの内容を新しいフォーマットに入れるに留まっているが，今後とも細部を継続して検討し，使いやすく親しみやすいものにしていく．7地方支部のホームページを新たに作成した．基本的スタイルは統一し，各支部の独自性を出すための自由な部分は保つようにした．コンテンツ掲載内容の変更や確認のため，確認プルーフサイトを設置した．地方支部ホームページの基本的な維持費として試算された年間50万円(7支部)は学会負担とし，自由部分を各支部が負担することとした.

④バナー広告

現在5社のバナー広告を掲載している．平成17年度に数件の新規申し込みがあったことから，広告基準や申込書を新たに作成し，契約書を取り交わす方向で準備を進めている.

⑤委員の交代

東北支部の武藤　元委員が退任し，田村　明委員が就任した.

(3)糖尿病性腎症合同委員会　　世話人　岩本安彦

平成17年度の第1回合同委員会は5月14日(土)神戸国際会議場にて両学会からのアドバイザーを含め18名が出席し，猪股茂樹委員が議長を務めて開催され，以下の議題について討議を行った.

①「糖尿病性腎症の新しい早期診断基準」の学会誌掲載について

②厚生労働省研究事業「糖尿病性腎症の寛解を目指したチーム医療による集学的治療」について

③糖尿病学会データベース構築委員会からの報告

④糖尿病学会と日本透析医学会との共同研究：DM透析患者の血糖コントロールをどう評価するかについて

⑤「Time to act」の翻訳と刊行について

平成17年度の第2回合同委員会は12月4日(日)(於：霞ヶ関ビル33階会議室)に両学会ならびに日本透析医学会からのアドバイザーを含め16名が出席し，松尾清一委員(腎臓学会)の議長の下，以下の議題について討議を行った.

①日本透析医学会と日本糖尿病学会との共同研究：透析患者における血糖コントロールの評価法について

②第51回日本透析医学会での上記共同研究に関する特別企画について

③糖尿病性腎症の食事制限の改訂について

④「糖尿病性腎症の寛解を目指したチーム医療による集約的治療(DNETT-Japan)」の進捗状況について

⑤糖尿病性腎症患者データベース構築について

⑥慢性腎臓病(CKD)対策についての現状報告と提案

(4)移植関連学会合同委員会膵臓移植特別委員会

委員長　谷口　洋

移植関連学会合同委員会の下部組織としての膵臓移植中央調整委員会は，糖尿病学会代表3名，膵・膵島移植研究会代表2名，腎臓学会代表1名，移植学会代表1名によって構成されている．主要な役目は，膵臓移植を行う施設を評価し認定する作業と膵臓移植の手順を定め要綱を編纂すること，ホームページによる広報活動と日本移植ネットワークとの連絡などである．また，本委員会は7地域(糖尿病学会の地方会の区域に一致)に糖尿病学会から委員2，腎臓学会2によって構成される「膵臓移植地域検討委員会」と，各移植施設に所属する膵臓移植に習熟した移植医を中心に構成された「膵臓移植実務者委員会」を下部組織に持つ．地域検討委員会は膵臓移植を希望する患者の日本移植ネットワークに登録するための審査をし登録を助ける作業をする．一方，実務者委員会は，膵臓移植手術の際に膵臓移植のスペシャリストである委員を全国から結集し，移植手術の際十分な活動が出来るよう調整することにより移植手術のクオリティを担保し，常時わが国での最もよい膵移植が行われることを目的としてい

る．

現在，膵臓移植中央調整委員会の糖尿病学会からの委員は，金澤康徳(委員長)，吉川隆一，谷口　洋の三名である(膵臓移植に関する実施要綱参照)．また，膵臓移植地域検討委員会で移植希望の申請者の適性を判定するために糖尿病学会の各地方会より2名の委員に出て頂いている．

膵臓移植を希望する糖尿病患者の登録は2006年2月28日現在182名，移植手術25名，うち23名は移植後インスリンフリーであり，1名は術後早期の拒絶反応により，もう1名は消化管穿孔，腹膜炎を来たし移植膵を摘除せざるを得なかった．本組織での最初の手術例は既に術後6年を経過しており，現在までの膵臓の生着率は90%以上を維持し死亡者は0である．これは世界的にもトップの成績であり，これらの成績は膵臓移植中央調整委員会のホームページ http://www.ptccc.jp にて公開されている．登録してドナーの出現を待っている患者は143名である．これは，総登録者数から移植生着例の数を引き，さらに待機中の死亡者10名と登録更新をしなかった患者数を引いた数字である．

本委員会への糖尿病学会からの助成は，中央調整委員会で糖尿病学会を代表している委員が中央調整委員会へ出席するための旅費，地域検討委員会の事務の費用として10万円×7(2回)及び実務者委員会の幹事の連絡用の携帯電話の料金である．中央調整委員会の事務的費用は主として厚生労働省より給付された助成金によってまかなわれていたが，助成金は2004年までで打ち切られたため，2005年以降は財団からの助成に依存している．

(5)糖尿病学用語集編集委員会　委員長　石田　均

平成17年度中に「糖尿病学用語集第2版」を刊行すべく，活動を継続した．

①平成17年(2005年)9月3日に平成17年度第1回編集委員会を開催し，予め送付した第2版の見本に対する意見の整理と検討を行った．そして個々の意見に対する検討結果を，平成17年(2005年)10月4日に委員長名で送付した．

②これらの検討結果を踏まえて，最終的な訂正を加えた．

③平成17年(2005年)11月21日に「糖尿病学用語集第2版」第1刷が発行された．最終的に英和編(6,911語)，和英編(6,704語)，略語編(851語)の構成にまとめ，解読を付した用語数は英和編のなかで668語と，その約9.7%を占めた．また用語解説の執筆者は69名，執筆協力者は38名であった．

平成14年(2002年)10月より約3年をかけて，今回の発行に向けて作業を進めて来た編集委員の方々のご努力，ならびに春日雅人理事長をはじめとする理事各位のご助言に対し，そして関係者各位より貴重なご意見と多大なご協力を賜りましたことに，重ねて深く感謝の意を表します．

(6)専門医取得のための研修ガイドブック作成委員会　委員長　岡　芳知

平成15年4月に改訂第2版を出版したが，新しい治療薬や治療法についての記載と全体にわたる追記・削除を行い，最新の内容の改訂版を平成18年4月に出版した．

(7)倫理委員会　委員長　岩本安彦

本学会の調査研究事業として新たに認められた「若年発症2型糖尿病の合併症発症率の全国専門施設における調査」に関して，提出された審査申請書ならびに関連書類につき，審査中である．

(8)科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン策定委員会　委員長　田嶼尚子

平成17年度は2005年7月8日(金)に東京にて委員会を開催した．2004年5月に出版された本書は，平成16年度に施行したアンケート調査の結果評判が良かったこと，その後，新たなエビデンスが集積していることから，昨年度の委員会で，改訂第2版を発行することに決定した．原稿締切：2005年12月20日，査読会開催2006年1～7月，最終原稿締切：2006年8月，校正刷り校閲：2006年10月～2007年2月，刊行予定：2007年4月(「第50回　日本糖尿病学会」というスケジュールで作業を進めている．2006年4月現在，23項目のうち，6項目が終了，再改訂中1項目，査読委員に査読依頼中2項目，査読開催予定10項目，原稿未脱稿4項目で，ほぼ予定通りの進捗状況である．

4.「糖尿病学の進歩」開催について

1)第41回「糖尿病学の進歩」
　会　期　平成18年9月29・30日(金・土)
　会　場　ロイトン札幌，他
　世話人　羽田勝計(旭川医科大学内科学講座)

2)第42回「糖尿病学の進歩」
　会　期　平成20年2月15・16日(金・土)
　会　場　サンポートホール高松，他
　世話人　石田俊彦(香川大学医学部内科学講座)

5. 平成17年度収支決算に関する件(河盛理事)

総会で審議の上，17年度収支決算書が承認可決さ

れた(本号 p 609～p 618).

6. 平成 18 年度補正予算並びに平成 19 年度事業計画および収支予算に関する件(岩本理事・河盛理事)

総会で審議の上，平成 18 年度補正予算並びに平成 19 年度事業計画および収支予算が承認された(本号 p 619～p 627).

7. 名誉会員の推薦に関する件

理事会が推薦した豊田隆謙氏が名誉会員に承認された.

8. 学術評議員の承認に関する件

本年度は該当者がなかった.

9. 次々会長(第 52 回学術集会)の選任に関する件

学術評議員会にて投票により第 52 回会長に柏木厚典学術評議員が選出され，総会において承認された.

10. 第 50 回年次学術集会に関する件

平成 19 年 5 月 24・25・26 日の 3 日間，仙台サンプラザ，ホテルメトロポリタン仙台，他(宮城県仙台市)において開催の予定である.

11. 理事および監事の承認に関する件

各支部および理事会から推薦された 18 名の理事候補者と学術評議員会から推薦された監事候補者 2 名の就任が承認された.

1. 理　事

北海道支部	羽田　勝計	旭川医科大学内科学講座
東北支部	岡　　芳知	東北大学医学部糖尿病代謝科
関東甲信越支部	渥美　義仁	東京都済生会中央病院
	岩本　安彦	東京女子医科大学糖尿病センター
	門脇　　孝	東京大学医学部糖尿病・代謝内科
	河盛　隆造	順天堂大学医学部内科代謝内分泌
	田嶼　尚子	東京慈恵会医科大学糖尿病・代謝・内分泌内科
中部支部	小林　　正	富山大学附属病院長
	佐藤　祐造	愛知学院大学心身科学部健康科学科
近畿支部	柏木　厚典	滋賀医科大学内科学講座
	春日　雅人	神戸大学大学院医学系研究科
	清野　　裕	関西電力病院
	南條輝志男	和歌山県立医科大学学長
中国・四国支部	石田　俊彦	香川大学医学部内科学講座
	加来　浩平	川崎医科大学糖尿病内分泌内科
九州支部	荒木　栄一	熊本大学大学院医学薬学研究部代謝内科学
	名和田　新	福岡県立大学理事長兼学長 九州大学大学院医学研究院特任教授
理事会推薦	堀田　　饒	労働者健康福祉機構中部労災病院

以上 18 名

2. 監　事

貴田岡正史	公立昭和病院病棟部長
武田　　純	岐阜大学大学院医学系研究科分子・構造学講座

以上 2 名

12. 小児糖尿病委員会委員の交替に関する件

任期満了に伴い小児糖尿病委員会の委員が交替することとなった.

小児糖尿病委員会 2006 年度選出委員(2006 年度～2009 年度)

北海道支部	福島　直樹	市立札幌病院　小児科
東北支部	赤井　裕輝	仙台厚生病院　糖尿病代謝センター
関東甲信越支部	雨宮　　伸	埼玉医科大学　小児科
	浦上　達彦	駿河台日本大学病院　小児科
	宮本　茂樹	千葉県こども病院　内分泌科
中部支部	奥山　牧夫	中部学院大学大学院　人間福祉学研究科
近畿支部	稲田　　浩	大阪市立大学医学部付属病院小児科
	宅見　　徹	市立小野市民病院　小児科
中国・四国支部	横田　一郎	独立行政法人国立病院機構香川小児病院
九州支部	岡田　　朗	岡田内科クリニック

13. 「治療の手びき」編集委員会委員・インターネット委員会委員・専門医試験委員会委員の交替に関する件

委員の辞任に伴い各委員会の委員が交替することとなった．なお，中国・四国支部の「治療の手びき」編集委員会委員については，後日選出する．

		新	旧
「治療の手びき」編集委員会	中国・四国支部		貴田　嘉一
インターネット委員会	東北支部	田村　　明	武藤　　元
専門医試験委員会	関東甲信越支部	佐々木　敬	八木　一夫

14. 平成 18 年度選挙管理委員会委員の承認について

細則第 38 条により，下記の様に承認された．

北海道支部	柳沢　克之	市立札幌病院　内分泌代謝内科
東北支部	山田　憲一	山田憲一内科医院
関東甲信越支部	齋藤　宣彦	国際医療福祉大学附属三田病院
中部支部	榊原　文彦	住吉町クリニック　内科
近畿支部	西沢　良記	大阪市立大学大学院医学研究科
中国・四国支部	谷澤　幸生	山口大学大学院医学研究科
九州支部	榊田　典治	熊本県立大学環境共生学部
会長経験者	河盛　隆造	順天堂大学医学部内科代謝内分泌

15. 「糖尿病学の進歩」プログラム委員会について

細則第 42 条により，下記の様に決定された．

第 41 回「糖尿病学の進歩」世話人	羽田　勝計
第 42 回「糖尿病学の進歩」世話人	石田　俊彦
第 50 回会長	岡　　芳知
第 51 回会長	門脇　　孝
学術担当理事	小林　　正

16. 学会後援について

今回は申し込みがなかった．

17. 細則第 25 条および第 32 条「日本糖尿病協会委員会」の変更に関する件

細則第 25 条および第 32 条を下記の様に変更することとした．

現　　行	改　　定
第 6 章　会務の分担	
第 25 条　庶務を分担する理事は，次の事項に当る．	第 25 条　現行通り
(1)会員に関する事項	(1)現行通り
(2)集会に関する事項	(2)　〃
(3)議案に関する事項	(3)　〃
(4)事業の企画に関する事項	(4)　〃
(5)日本糖尿病協会に関する事項	(5)削除
(6)外部との折衝	現行(6)を(5)とし以下順次繰り上げる
(7)以下，省略	
第 7 章　委員会および委員	
第 32 条　本会に日本糖尿病協会委員会をおく．	第 32 条　現行通り
②日本糖尿病協会委員会は支部の推薦に基づき，理事会の承認を経て理事長がこれを委嘱する．その任期は 4 年として再任をさまたげない．	②現行通り
③本委員会は理事 1 名各支部 1 名の委員をもって組織する．委員長は委員会の推薦に基づき，理事長がこれを委嘱する．	③本委員会は，理事を含む委員若干名をもって組織し，委員長は委員会の推薦に基づき，理事長がこれを委嘱する．
④本委員会は別に定める規定に従って業務を行う．	④現行通り

【下線部を変更もしくは削除する．】

事由・「第 25 条(5)日本糖尿病協会に関する事項」は「第 25 条(6)外部との折衝」に包含される．

以上　文責　庶務担当常務理事　岩本安彦